

時代を超えた技術学、 ハチ公との物語



忠犬ハチ公の飼主として知られる上野英三郎博士の胸像

の胸像は、我が国を代表する彫刻家である北村西望の昭和5年の作品である。上野英三郎先生（1871—1925年）は、我が国の農業工学および農業土壌学の創始者である。38歳で著した「耕地整理講義」は、農業土壌学の最初の体系的なテキストであり技術者に対して設計の指針と思想を示すハンドブックである。農学科出身の上野先生は、土木工学や機械工学を西欧の文献に学ぶとともに、西欧にはない水田についての用水計画や整備技術を実験と調査に基づいて創造的に生み出した。とくに、人力で農業が行われていた時代に、牛馬を効率的に使用して労働生産性を高めることが課題になると見通し、そのための水田整備（長辺が100m程度の大区画、農道の整備と圃場への接続、用排水の分離など）を主張し、実際は1960年代からやっも行われた機械化のための水田圃場整備のモデルを、その60年も前にデザインしていた先見性には驚くべきものがある。農商務省での講習会と東大の講義で直接の教えを受けた技術者は3000人にとぼり、農地と灌漑排水施設など農業生産の基盤を作る技術者集団を育て、農業土木学というわが国に独自の技術学を工学部土木に頼ることなく農学の中に作り上げた。

大の犬好きであった上野先生は、ハチと名付けた秋田犬の子犬をとくに大事に育てかわいがり、大学への徒歩での出勤（当時農学部は駒場キャンパスにあった）と、試験場や現場への出張の際は渋谷駅に、いつも送り迎えさせていた。頭のよいハチは上野先生が何日も戻らなかった時は必ず渋谷駅から帰ることを以前から理解していて、上野先生が大学で急死した後も10年間、渋谷駅の改札口に毎日通って死ぬまで大好きな飼い主の帰りを待ち続けた。この、東大の歴史上の、犬と人間との愛情関係を象徴する逸話を標すために、ハチ公没後80年の2015年春に除幕を目指して「ハチ公と上野博士の像を東大につくる会」（代表者…研究科長）が募金活動を進めており、ご協力をお願いしたい。